

開館100年を迎えた国立科学博物館

村山 定 男*

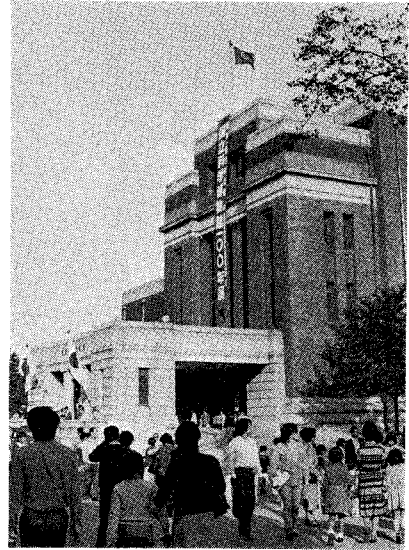
国立科学博物館は昨 1977 年で開館 100 周年を迎え、11 月 2 日には天皇陛下の行幸を仰いで盛大な記念式典が行なわれた。

明治 4 年、文部省に博物局が設置され、湯島聖堂内に展覽場を設けて翌 5 年から文部省博物館の名で一般に公開した。これはその後一時ウィーン万国博覧会事務局に併合されたが、同 8 年 2 月文部省にもどり東京博物館と改称された。その後文部省は上野公園地内（現在の東京芸術大学構内）に建物を新築して上記の資料を引き継ぎ、明治 10 年に新たに「教育博物館」を発足させた。この明治 10 年（1877 年）を現在の国立科学博物館の創立としているわけである。

この間明治 22 年には教育博物館が縮小されて高等師範学校附属となってお茶の水の聖堂内にもどったり、そこでようやく拡充の気運に向い大正 10 年東京博物館と改称した矢先、大正 12 年の大震災で全焼するなど幾多の浮沈がくりかえされた。お茶の水で仮復興した東京博物館は昭和 6 年上野公園の現在地に本格的な建物を新築し、名前も東京科学博物館と改めて再出発した。これより先、大正 13 年には帝室博物館にあった自然科学関係の標本資料多数が移管されて所蔵標本は急増している。現在展示されている著名な隕石標本の多くはその時に移されたものである。

戦後の昭和 24 年には館名を国立科学博物館と改め、その後増築もつづけられ、さらに港区白金の国立自然教育園を併合し（昭和 37 年）、新宿区百人町に自然史研究部門と標本庫とを合わせた分館を開設し（昭和 47 年）、筑波研究学園都市には附属筑波実験植物園を建設中であり、着々と拡充が進められている。

科学博物館と天文とのむすびつきも長い歴史をもっている。明治 10 年開設の教育博物館の資料目録を見ると、そのころ既に星学機械という項目が見られ、天体望遠鏡などもあったらしいが詳細については残念ながらよくわからない。お茶の水にあった大正時代には多くの特別展覧会が開かれたが、その中には時の展覧会などもあり、時の記念日のものになった。昭和 6 年上野新館開設に当って、屋上に天体望遠鏡室が設けられ、日本光学製の当時最新鋭の 20 cm 屈折望遠鏡がおさめられた。関口鯉古博士が学芸委員を兼任され、鈴木敬信氏が囑託となられ



て講演会、観測会など天文関係の活動が本格的に開始された。このころから東京大学天文学教室や東京天文台の先生方がしばしば講師を引受けられたが、終戦後昭和 21 年 4 月からは日本天文学会との共催による天文学普及講座をはじめられ、現在は天文学普及講演会と改めたが昨年 12 月で第 372 回を数えており、博物館の中でも最も長命な催物となっている。この講座に最も多数回講義されたのは元東京天文台報時課長の水野良平氏で、第 1 回以来 180 回以上の講演をしていただいた。11 月 2 日の記念式典には各界からの功労者 13 氏が表彰されたが、水野先生もそのお一人である。

昭和 46、7 両年度の予算で天文関係の展示室も本館 3 階に更新整備され、新たに 60 cm 反射望遠鏡（日本光学製）も設けられて面目を一新した。こうした拡充整備に当っては多くの天文研究者の方々の御助言、御協力をいただいております。またアマチュア天文家の方々と博物館とのつながりも深いもので、特に故神田茂先生が創立された日本天文研究会は昭和 20 年 12 月以来 30 年あまり、博物館で毎月例会を開いており、その会員の人たちには当館の事業にも少なからぬ御協力をいただいている。

今年 1978 年からは科学博物館も次の 100 年に向けて新たな歩みをはじめのわけであるが、今後も天文関係各位の変わらぬ御援助によって天文学の普及、教育に貢献することができるよう願っている。

* 国立科学博物館